

## 礼に始まり礼に終わる

「面あり！勝負あり！」

四月に行われた呉市民大会剣道の部中学校男子決勝。三年生の武は、惜しくも個人選決勝で敗れ準優勝となった。試合後に礼もそこそこに会場を出た後、竹刀しなを床にたたきつける姿に、周りからどよめきが上がった。

剣道を幼いころから町道場で習っていた武は、中学校に入ってから常に周りから注目される選手だった。

実際、昨年の新人戦で優勝した武が当然、この大会でも優勝するものと誰もが思っていた。しかも武を負かしたのは、中学から剣道を始めた選手だった。そのことが武にはショックだった。

「次は負けるわけにはいかない。」

次の六月にある呉市総体は、全国大会につながる大会だ。武は中学校に入学したときから、全国大会に出場するのが目標だった。悔しさといらだちをあらわにする武に、周りは腫れものにも触るように気を使って黙りこんでいる。ただ一人、すでに女子の部で優勝を決めていた女子部長の由美が責めるようなまなざしで自分を見ていたが、それも無視して他の部員をほったらかしたまま、一人、会場を後にした。

次の日、家の用事で少し遅れて朝練習にやってきた由美は、体育館の入口に群がっている後輩達を見付けて声をかけた。

「どうしたの？なぜ入らないの？」

「だって、武先輩が……怖いです。あいさつをしても黙って返事もしてくれないんです。」

体育館では丸坊主になった武が一人、一心不乱に素振りを繰り返していた。「放っておきましょう。今は何を言っても無駄よ。」

由美はそう言って、みんなを引き入れて、武を無視する形でその日の朝練習を始めた。それは武にとっても都合だった。剣道部には、三年生は由美と武しかいない。最初はもつといたが、全国を目指す武の厳しい練習メニューに付いていけず、一人また一人とやめていった。練習相手にもならない由美や後輩の指導をする余裕は今の自分にはないと武は思った。いや、由美や後輩達の指導で自分の練習に打ち込めなかったのが敗因ではないかという考えが浮かび、なおさら、これでいいんだと自分に言い聞かせていた。

剣道の練習を全てに優先することにした武にとって、その日からは授業も、余計な時間に思えてきた。それまでは、授業でも快活で発表もよくして授業を盛り上げていた武だったが、人が変わったように、ぶっきらぼうになり、



無気力になった。その一方で、夜の町道場での練習時間は毎日延長して猛練習を続けていた。

そして、それからしばらくして、ある日の五時間目の英語のときだった。武は連日のハードな練習による疲労で、猛烈な眠気に襲おそわれていた。

今日は、いつも授業でゲームなどができる大好きなダリウス先生の授業だったが、武は授業の最初の礼のあと、座ると同時にそのまま机に伏せた。ダリウス先生が自分を注意する声が聞こえたが、無視をして伏せていた。あたりにどよめきがおきたが、それも無視した。

（俺には、全国大会があるんだ。部活後には夜の町道場での練習があるし、みんなとは違うんだ。一時間くらい寝かせてくれたっていいじゃないか。）心の中で武はそう叫んでいた。

ダリウス先生はやがてあきらめたのか武の耳元で、放課後職員室に来るように言った後、授業を続けた。しばらくして教室にはいつもと変わらない笑い声が戻った。武は自分を無視して飛び交うその笑い声を聞きながらなぜかとてもみじめな気持ちになった。そして結局その時間顔をあげることができなかった。

その日の放課後、武はしぶしぶ職員室を訪ねた。しばらくするのは覚悟していた武だったが、ダリウス先生はいつもの明るい笑顔で迎えた。

「武、よく来てくれました。じゃあ、これで今日の授業を終わります。シーユーアゲイン！」

ダリウス先生はそれだけ言うと、帰ろうとした。

「あの、どうして怒らないんですか？」

「武には言わなくても分かっているでしょ。ただ、今日、武とは、授業の最後の礼がきちんとできませんでした。だから、それをするために来てもらったんです。ほら、剣道ではいこうでしょうか？『礼にはじまり、礼に終わる』って。礼って単なるパフォーマンスなんですか？きちんと礼をして終らないと、勝っても負けても、次の試合は始まらないでしょ？」

「礼に始まり、礼に終わる」と言われる剣道は、試合ばかりでなく練習の始めと終わりにも必ず黙想をして自分と向き合う。その日、町の道場で遅くまで練習した武の黙想は、武が剣道を始めて今までの中で一番長かった。その後、誰もいない道場で武は、暗闇に向かって静かに深い礼を六回も繰り返した。



次の日の朝、練習に集まった由美と後輩達を正座をした武が迎えた。

「さあ、みんな。市総体はもう始まっているんだぞ！」